貝尽浦の錦

下

千百三十
甲
特
7
2
73
尾張伊藤圭介之家
伊藤篤太郎記

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

特7-73

伊藤長太郎記

# 貝盡浦乃錦巻下

目録

百人圖
追補人圖
前歌仙人歌并圖
後歌仙人歌并圖
貝蓋圖式并貝あいせゝ指南
相貝經



国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』　請求記号 特7-73

ガラス使用

# 百介圖

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

香螺介
筍介
酸介
きせるゝ介
たゞみ巻介
曲介
巻貝介
ぬぐゝ介
貝ゐ
車介
仰
俯
仰
俯
仰
俯

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

鬼さゞか介

たうだが介





追補介圖

百貝畜ふ大名貝とも紅貝とも云色介是横介の別種

百貝畜ふちどろ貝とも袖介次絵中の拍別也

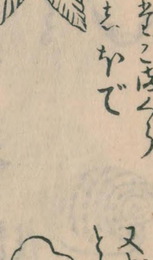
紅貝中小穴ありて百貝畜ふ蟹也

眠貝是畜とも

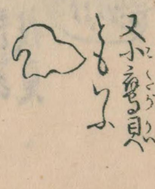
食貝揖介とも

海燕さこ高くらまちで

筆介とも



淺貝とも



森貝とも

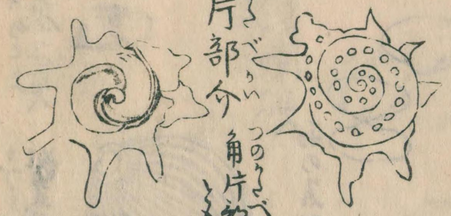




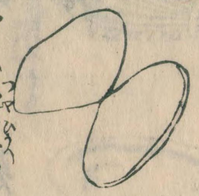




雀介のうりうり汁又ふ意貝とも



片部介角片とも



持介

中小殼老りて百貝畜ふ出

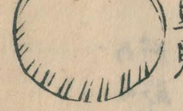
蛤介

雲介

梶介

同

圓貝



馬貝

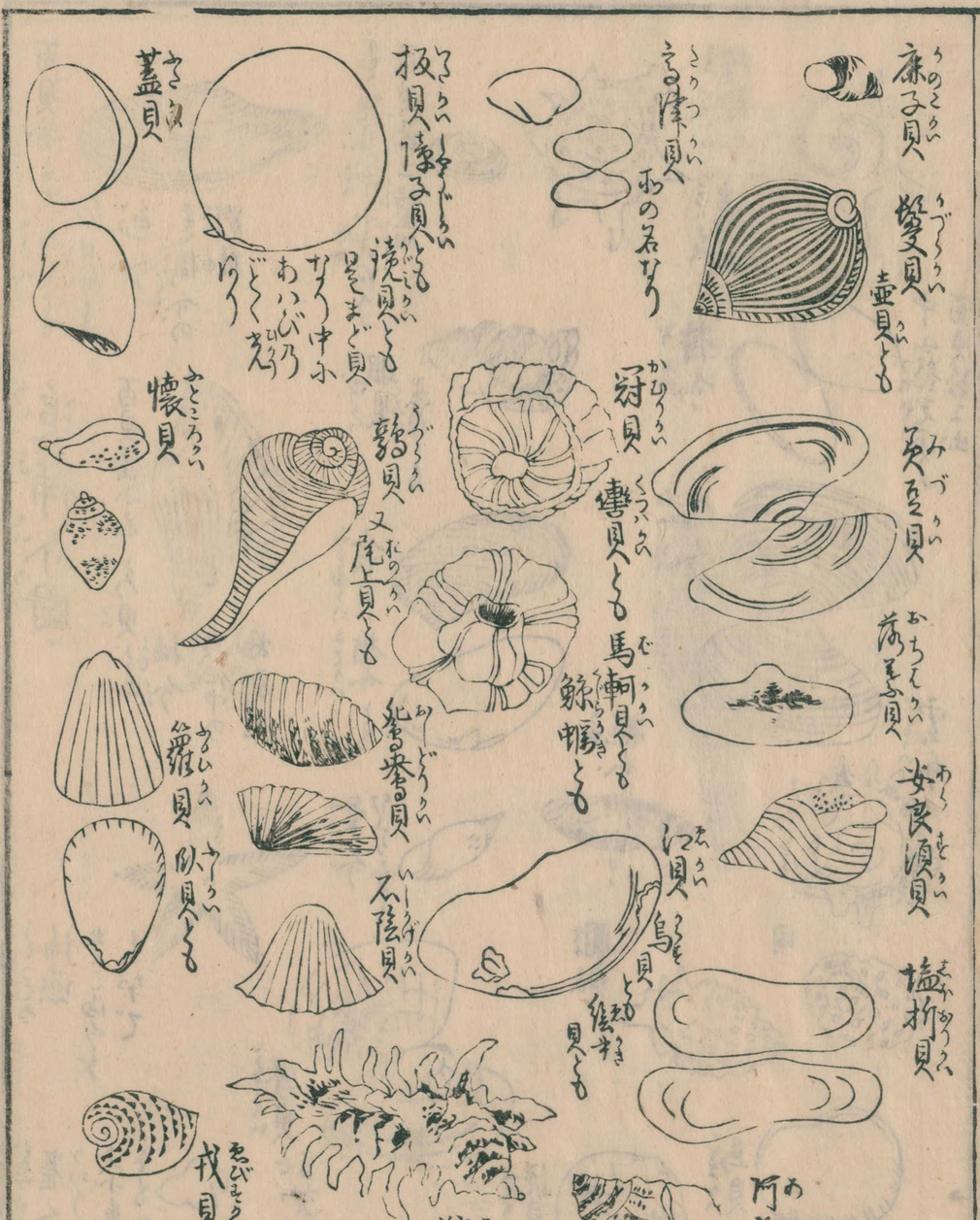
泥貝とも



国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73

ガラス使用

桜尾螺
玄蕃集ニハ此字を
ゆらぶいと刻ぎろハ
わやまうなるべ
碧貝
鶏螺
鰤貝
緑貝
志ぢゞ貝
古負貝
破太志貝
面貝
玉虫貝
鳥貝も
久保貝
見かんぐると
云とのぐ
紅螺


庶子貝
壺貝とも
雲津貝
西の石ち
蓋貝
扱貝 傳ま貝
焼貝とも
ほそまど貝
なつ中ホ
あハびろ
ごくさ
懐貝
冠貝
蠣貝
馬輌貝とも
鯨帽とも
弱貝 又尾上貝とも
蜜蜜貝
羅貝 砌貝とも
不陰貝
安良須貝
塩折貝
江貝 鳥貝
絵書貝とも
戎貝
敷貝
阿野貝

# 前歌仙貝之圖

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

前歌仙三十六首和歌

山家集

笹屬介　五一

波かけの吹上の浜れもぐれ貝風をぎおろしいそぎ拾ひ集

忘介　右一

後拾遺

松山のまつの浦のなみさよせば忘れひて恋べ忘れ貝

梅花介　左二

春風の波やかすみきんみちはくの籬が島のむめの花を拾ひ

榊介　右二

夫木　西行

春さていかもこのくれあまくいまぐひろみんさ貝を

片貝　左三

いなば嶋や二見れうらのかゝり貝あいで月と待で陸なよ

石決明貝　右三

伊勢のあまれ釣ゝなふかゝくてよのつびの貝のかさねりして

黄貝　左四

夫木

むらされ貝よる浦乃長潟乗て波のへ陸ぶ来とうえる

白貝　右四

たゝぐゝしきらの浦れ白貝いと友さへ来る雪とまぶる足跡

蛤貝　左五

今ぶ来る二見の浦のそ海づを貝あい歩とぞおりよ形ろ

蜆貝　右五

たゝる磐田の潟のあり人よ去まるいとがひぞある へき

海貝　左六

江の浦ゆ来ぶ貝ゑ乃ゆなひこゞ出ゆ乃ゆ形よゞ見間人も和し

馬刀貝　右六

後撰　源英明

行ぶ方れ海乃ゆのまの海てるまて去ぶじるみて波の音ゆなくも

花貝　左七

天木

ねなくうらつまゝ波のおゝ形ぞや ちゞ乃くよるゝ代れ花貝へ

翡麦貝　右七

天木　西行

おもゝ山なでしこ貝よ去くゝ色いやまゝ去ゝ乃ゆ男よ

空背介　左八

拾河百首師頼
もゝかゝるなれはのうせ貝あはいでやゝぬかをやあさん

袖介　右八

夫木　西行
波のうへのくれ袖貝をきゐひろ風のあゝみとくゝわた

船介　左九

夫木
こゝ人を漕ゐとゝ舟貝いぬゝる風やはるゝなるゝん

蜑介　右九

波戸ゝ一種もゝ城住吉とゐやしいるゝわゐがゝゝ蜑

浦歩介　左十

夫木
四海さいぐゐのとゝ蜑をかきゐて浦歩貝を拾ひつゝ

磯介　右十

夫木　人丸
ゝゝ屋のむゝよゐゐ浦ゝ走る磯貝のかゝ恋のゝ程辛いゐるはゝ

佐多部　左十一

さゝゝすむ海戸れ岩つゝを見野出ゝ所き海士の海しなるゝ

ゝ種介　右十一

夫木
君ゝ代れ岩めゝとゝゐる長演ゝふゝゝの貝れ報もつき磯じ

物あゝ介　左十二

ちゝとゝゐれゝゝへゐはき海ゝ人あゝ貝いたくとゝゐゝ

津介　右十二

鴨長明
ゝゝみつゝ人いなゝれゝゐ貝ないねゝて方をゝゝつ



国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

鳥貝　左十三

山家集西行
沼もなかれ流れの末の貝拾ひやとくもおりかゆる事

雀貝　右十三

沼もなかれ竹の呂なれ雀貝くらゐ拾き世もわひ小貝くれ

都貝　左十四

夫木
そとも迄ばかしもたるこの名ふおへる放貝をでまづ拾ひぬる

猿尾螺　右十四

山めぐりのこ小法師なるほらの貝へふくをまくれ秋の夜乃月

文蛤貝　左十五

信實
いさや貝ばこ文蛤の家と聞くるのを誤ばかり海南の家と貝へし文蛤いわさう形

わやしくをとらうめばしおいるや貝へ小石ぬく海士のかるひれらぎあ

色貝　右十五

夫木　菩提院関白
汐みてバ磯乃よなおく色貝のうれ出ぬ波ぬ寄るこの事

破貝　左十六

夫木
和歌の浦小ぬるきくるけれ貝も拾へ拾うどよ又おどろぬる

疵貝　右十六

与謝の海乃汐干れかるの真砂地を行ばきど貝ひろとしいふ

小貝　左十七

山家集西行
なふは沼ちはひよれて出くんちくれの小貝拾ひり

真藻拾貝　右十七

同
志ほそるまとそれ小貝ちくを色の浜といふやあるむ

浪間拍介　左十八

雅俗めづらしまがしハをるひどん日も元神小月でゆどん話

貽介　右十八

あこやとゝ云い貝へのかゝとゝ云ゝおきゝ慶のわとゝ云るなるう

元禄二巳年　林鍾上旬

右歌仙貝歌撰人の撰集せしゝ中ゝ歌仙の序文小えへゝ貝れ蜀を

うゝ云ゝ撰わきゝ　後歌仙の序文小えへゝ貝れ蜀を

おゝ出しゝ　ゆるゝめゝしゝ　配尚も語多しゝ　上巻ゝ評るゝがゝ



## 後歌仙介之圖

ひらさき
しゃち貝

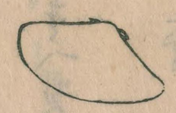
ちり
白貝

なでしこ貝

きさご
宿ろうハ

きさご貝

まき
牧貝



ちごり
あ多貝

きぢ
雉貝

いこや貝

あハび貝

かゝ貝

うゝせ貝

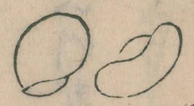
かな貝

あさり貝

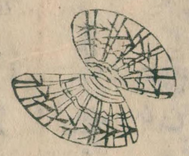
赤貝

ぬの
ぬのゝ貝

かゝ貝



あ
サア貝



こ
海貝

きぢ
きぢ貝

きみ貝

こ
小貝

ちくさ
千種貝

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73

ガラス使用

歌仙貝三十六種歌後集序

おなじき御紀貝源氏貝などハけぶ縁のぢうぢ神りるさ貝ハ
貝をもとむるもい唐のうゑゆをあれ貝べき西行法師がさうらの
わとくよみしハわこやれ貝かりけむをとゝろにかい今もさかう
とぶとる見ゆる神くかの御紀れ貝なぞ〳〵二十六種乃貝を
ゆのけたいへど礼ろく御れ貝をとゝわえざるゆや只貝よ付うる彩
御はを御仙貝とゝ名付めり此御紀貝よ花ぐつう貝を六けなり
先一ゆ貝は新勅撰の
伊勢れうゑわまのあてかるまて志ばしらみて海のひまゆ
志ま人わまの志ぶゑうてる秋ゆくつう磯菜などをつむものを



まてうゑといふとりん此御まて貝ふたくぶうゑや
二ゆよハかうる貝の御
伊勢海の入江れまろもひぐるゆりもかるの御い拾りし
わまもかるの御とつけうる貝のすゑは宮ばなどゝ〳〵
とゝいひぐしかるを御とゝ入うて南ゑの御ばりのひろよ
面白ぐかるの御よまぐゑをばあ丁の御ろひぐといつるなるべし
之ゆ貝はわま貝の御
法まうう一ようとうれを紅ゑとなりやしいなるあ丁のふうん
此御物の名ともゝえぐいゆふい人ゑぐよわうばなる
ミのゆゝなればいあるうひともえ丁御ろひる此御などやゆま

貝おい貝べよりそでうるがしきをういてもの
ぬりよいもうこの貝
あげまふくやしなれるくのるいもうこみてこもの
ぬいひいれ
ぬかの名あてよめるやわるくれいそしたるかしきの
たかしそのうがかもてこといる西行のあなどやかるのべうん
又ぬりよい分なし貝の貝
ぬかもろえびうこ浦のいそ西れ浦よる貝の分いらづよ
なうそて出るるぬるこなどいよくくるくるとうあ
六ぬりよい錦貝の貝
富士の孫れをえてやうすむ武蔵れとやくいのう烟ろうん

ぬかいの形はまとも見えぬ さの形までふこをつくしてよる貝い
みたの濁と見るなりう ぬかおそめ紅貝よいちく
面きう貝ぬりの中も彩なるぬ色あまむのてきもん
たもあうぬさきいけをぐひ いとんぬ

さざ貝　左一

（山家集西行）
波うち寄せ吹上げられし所のさざれ貝風にそよぐ音ばかりいそぐ拾ひたん

ひす貝　右一

（夫木 順徳院）
うみの底磯こす波の底貝ひろはずとなるはまぐりの声

梅れ花貝　左二

（衛後拾後拾）
春風に波やおりえんみちはくるのすぐ浦の梅乃さく貝

花貝　右二

（夫木）
枝おろしげく波のおく梅ぞやちるもくよりさく代の花貝

・榊貝　左三

（定家 建保百首）
伊勢の海波れ色より榊貝うひかる浦のさるのいろうめ

（夫木）
ちかはるまちの赤貝ひろひそ色の濱といふまやみちん

鞆貝　左四

（三条院御製）
おれまゝ塚ふ色をつゝてる貝ハふりきれ浦とみゆるなりる

色貝　右四

（名不記）
いろ〳〵の貝あつてこそ拾ハめきちくさの濱れわるのまふく

ひら乃貝　左五

（叡蓮）
山ぬしはれ吹うの矢筆ふそこともちぬきの上風

都貝　右五

（夫木）
ちとせ経れば玉しれかるの名よおへふらやこ貝とぞ先拾ひぬる

うち貝　左六

國鶴さいぐ芋のとぶ紫とかきらげて海うち貝と云ひつるの和

さざえ貝　右六

ちはへもゝ潮アれ岩つぐをとゝ出でいそきのあれ子なるかる

紫貝　左七

夫木

むらさきの貝よる浦の葵ゝ寄波れうへ数で見と入えきう

白貝　右七

名寄

ゝ数くゝとゝらの濱れ白貝ハなれ人ふまる雪かゝ数れ

なでゝこ貝　左八

夫木西行

あしかもひなでゝこ貝よ志くゝ色ハやゆとかるまもうしとそれ



浪間かゝハ　右八

後撰

雑波女がなゝまぐゝハを見る袖小日も著神小月数中ぐ稚子

きぬゝ貝　左九

ちぎゝを数ゝ衣れ浦の塩かけくゝてるきぬゝ数れひもなるよ

松　貝　右九

拾遺愚重

和ゝもゝるいおゝ乃浪路の海ゝ貝ゝひ海る美ふわいぐゝ数ゝやハ

ちぐ貝　左十

えゆちぐゝふゝをくわとの生ゝるなぐゝひ海る浦ゝ海ハぐゝやい

ちゝぐ免貝　右十

夫木大江廣重

波よすする井の三角の雀貝ゝうきゝて数世もあひゝ生れ

新六帖 信実
いかや貝　左十一

あこや貝　右十一

西行
あこやるの貝のかをつゝをきてたゝの面をとゝるあるう

千首 牡丹花
なびくよれ立ぢかいりでゝんわびの今れおのゞゝしい

かさゝ貝　右十二

後花園院御製
袖ハいいうひゝるれかゝしかあてよゝとも浦ハきます

うゝせ貝　左十三

續後撰集 後鳥羽院
波のゝみゝまの浦れうゝせ今むれきゝるふ袖ゝなるん



かゝ貝　右十三

玄旨院入道三条殿
うゝ浦の磯まれゝうゝよゝ形貝乃分いゝるうゝよゝなゝてねゝる

あさゝ貝　左十四

光俊
いゝ形の面れ志ひよゝ行さゝうゝとわゝるかひとゝでゝるゝ分をゝ形ゝ

志ゝ貝　右十四

師兼
伊勢ゝ海乃浦の汐貝おゝゝてよわゝるよ袖のぬゝきとゝいのゝ

ゝゝ貝　左十五

たゝのゝ形ゝ貝のゝきぬゝよ法のゝゝ乃浦よゝゝ分ハ

海乃記 志的
かゝゝ貝　右十五

ゝゝるゝ人いなゝゝさゝ乃かゝゝ貝何ゝねゝ法ゝて形ゝゝゝる

あ貝　左十六

（律師慈圓）海原やなぎふ雨ふる中の貝乃かしある色となれるかゝさ

こぜ貝　左十六

江の波よみぞ貝ひろふ人なしまぶ貝ひろふ人をれ

さゞら貝　左十七

（西行）今はさらにあさこれ浦のさゞら貝あハ世とぞ思ふかなしまれ

（千首為尹）ちぢみ貝　左十七

ちゝとるかゝれ浦乃ひろ人よさまろにいちぢかひぞ思ふ

小貝　左十八

（源師光）い松の原さよ千潟ゝ清よ洲と色くみやこの住ふ小貝ひろ

夫木

ふくさ貝　左十八

ふる代のゆきめとゝ乃ゆる七濱よ千種乃貝の数もつきず

右後撰紀貝　後撰よ姓名を記せるきば撰者をきゝば

前古紀乃内さきゝ序中ふ先人乃古紀貝の集を

新撰拾遺乃中ふ此書の始よ記をおゝ紀乃ふ

又一集の内ゝ六雅の中ふる貝きゝを

貝ゝ乃ふ貝　歌の冒ふ始ゝ載る前古

紀の中よ　余若年の内下河邊長流の選

集　古紀貝乃集別　今ハ久しくなりて

えんしつ
紛失しぬなり　抽むるなる是　雪乃　雪をや
雖　もるるわや　あ乃貝　はて貝れ二ツ　書雖
此書乃中の　最　仏　載せ　結ばば　二ツ　かの
ずし　き　抽ば　ゆ　く　べし　そ　く　後　仏　集　と
明　も　し　今　秘　仏　貝　の　集　異　同　なる　り　ば　ち
志　ん　が　は　あ　く　ふ　ば　こ　を　加　ふ　ば　く



# 貝蓋記

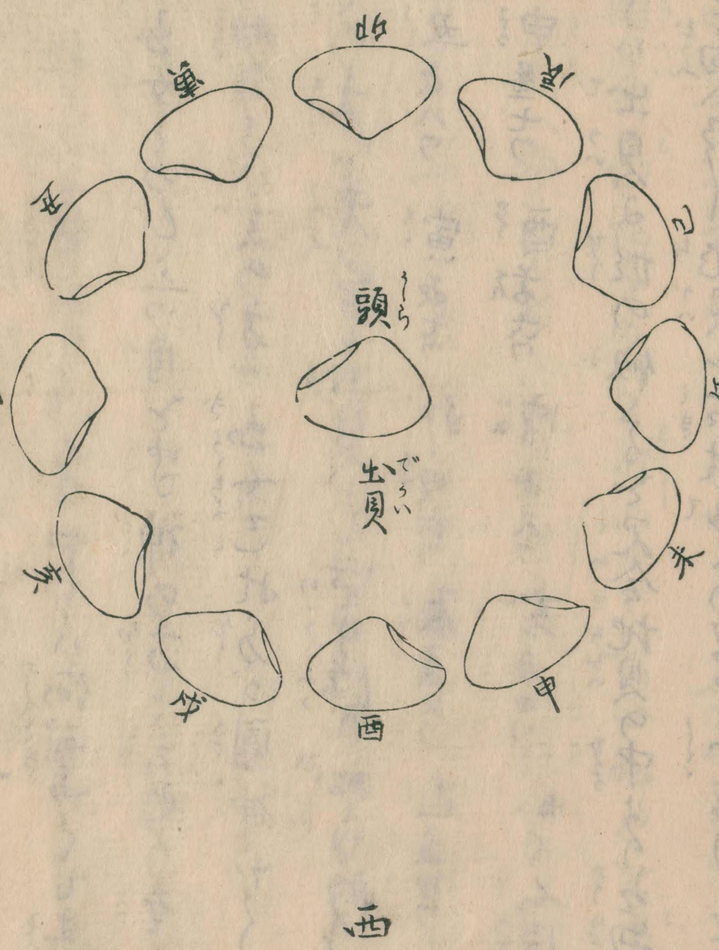
此戯は高家女児の口ずさみ　久しく伝れる家紋神主の
記ありて其始を篇事紀に出る黒貝姫與蛤貝姫命よりも抜た
金文を考るふさして貝合の　盤　とゝ　べきものなれば　品を各ゆ
ゝ　牽合　仆　含せるなり　次は　景行天皇五十三年　淡水門は　御幸
ゆ　を　ゝ　得白蛤のことを以て　後　とゝ　仏も　品　雖而　進
こ　の　ゝ　ゝ　ゝ　て　貝合の　起　と　ゝ　ふ　ゝ　ば　そ　と　ゝ　牽合の　説　ゆ
日本紀金文を考るに　此　貝合の　他　と　する　ゆ　ゝ　ば　近来世　み　彩る
書ふ　ゆ　を　載て　後　雪　直方の　説　に　出る　く　記せ　ゝ　余が　伝　彩　雪
家行の　作　と　ゝ　ゝ　い　ば　き　ゝ　是　な　る　こ　と　を　ゝ　ば　只　貝　の　ゆ　ハ　み　雪

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

なほども他の貝を不合の物を以て婦徳かたし一度嫁して一生
他のまふまんへざる貝人節の義ふるのこゝ此あこへをこゝ
女貝の孔と称るなり其姫つまれこゝなる愛る恵感あり
ものを他しこゝ世を偽ひ世るものとなる的師ようの人さこなる師を
なるざる片鄙の人ハ世苦ふ分くまれこゝなるこゝなる
とのなり委さるハ面接品攻なこでい知ぐし
先貝の数ハ二百六十ゆく一年の日れ数小家なく正月初午
のヨおりひとぐむ也まゞ毛氈を二枚麦中央小寸書紙一枚
を麦貝桶出貝の方ようり先一所中央へ出ル彩の方城
出人の方へ向るなり まよう地貝の桶ようり地貝を出し



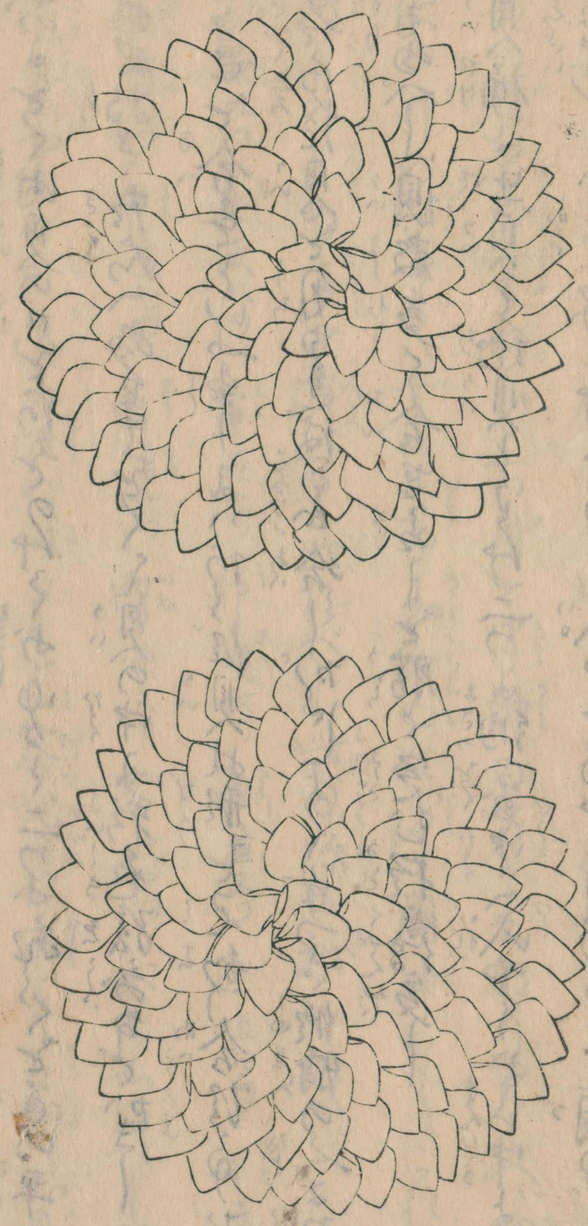
鶴ハ十二なり姫国月ハ十三なり



此の教ふかいこぞ丸く次第くふなるべし
玉女きく神と云習ひけるやうは何ものくも無ほとう
九つ目を玉女といひ六つ目を中神の方と云ふ者とへば相の
六つ印の時なるべ支の方が玉女已れ方が男神なるこれ
時くの支の方を考へる虹貝べし此の系秘の所
子数九つ　丑数八つ　寅数七つ　卯曉六つ　辰数五つ　巳数四つ　午数九つ
未数八つ　申数七つ　酉数六つ　戌数五つ　亥数四つ　かくの如べし
依蓋やうは出貝の形の似るを又合地貝の中より出る出貝乃
影の方を向へ地貝を右れまよの世くトうさくらひ上る
やうに取て片方へ合せ向へ出たるあいだきば又和地又合

かくいこれおひるる時は片方の神に神ぬ入神ぬ合へ合に
成ったのなかを出してそのうをきこまをあひる貝を
おのをく時貝の口をのをくゆると二つふれくとの平
れ世ぬくたへぬせてをくし貝の中に彩色孫あるべかきしの
こまを合せといふ事はいかに貝れ形を又新合ふるなる
各印記貝を用ゆ道ば玉合しかしよくまつき候特の人あひ
用ゆべ貝数多く合せるを勝と定む投口俗多
貝桶に出貝と地貝と二つに納玉中へ入やうに中より
ひくく小主孫うけまるく入るものなりのまし圖のごとし
地は右へ旋に出は右へ旋るべし

地貝納様之圖



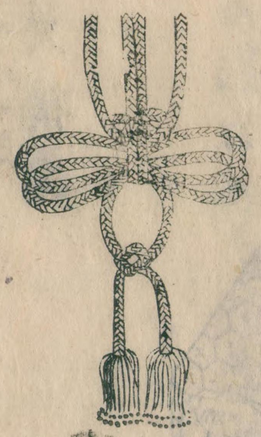
出貝納様之圖

右圖はじくんぞうだる次第くよかさのうへ上へ伸ばしく各納をくべし貝桶蓋の上細結びやうみを地貝桶ハ初と

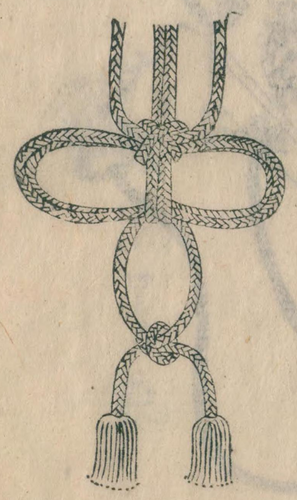




輪の方を上へ右雄えんぢうふ結び結目をとゝろ結びよりて出貝桶ハ細輪の方を下へ雄えんぢうる結ぶ結目を叶結びよりて圖のごとく



出貝桶雄雌蛉結圖



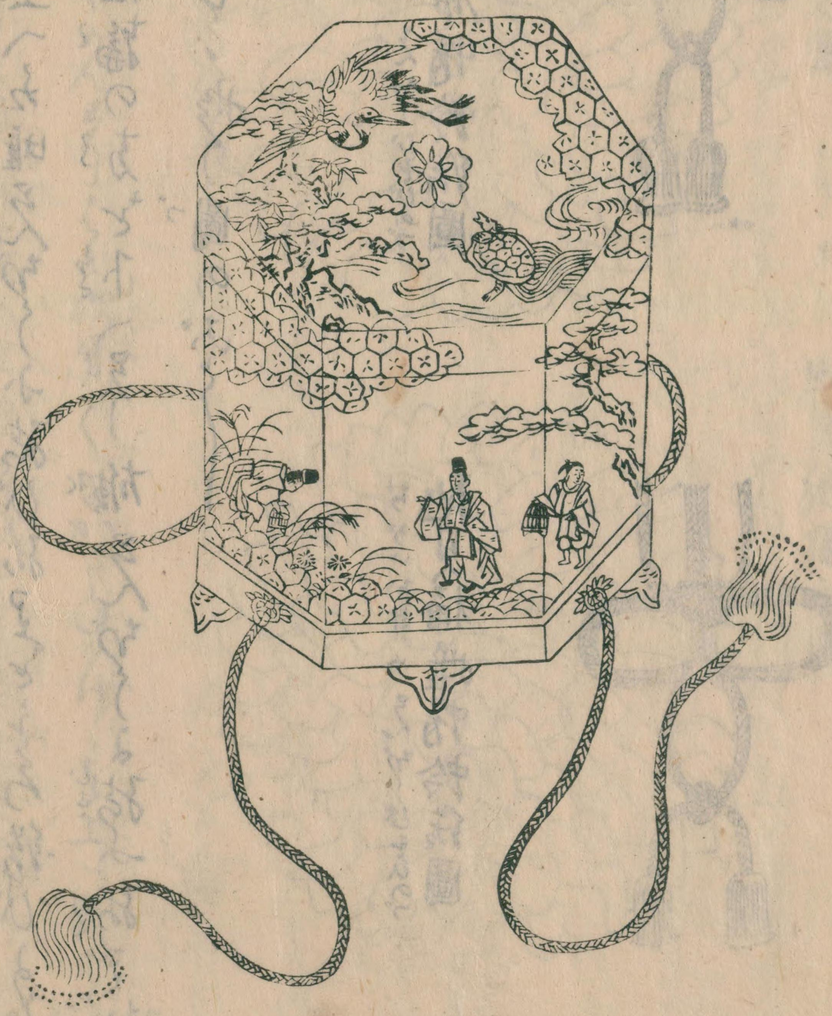
地貝桶雌雄蛉結圖





国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

貝桶圖



婚礼ハ貝桶ハ合ゝさばうり結ゝて也合方ゝハ貝の
みの出き方をおへして二つよりゝ我さをあハ右の方也たをば
だゝ方といふ古き法礼家の書ハ入ゝゝ
出貝蓋てゝバ又一ツ桶より出ハ次第ハかくのごとくいざゝ
地貝ゝゝゝゝ跡へ入ゝゝ貝を出てなゝよれ
やゝハらひ立てゝ入べし桶より貝の出し入ハ下ざはの
女の没日ハ功者の人ゝ為ゝあ

貝蓋記終

大枝流芳記

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

附録

相貝經

漢　朱仲　著

黄帝唐堯夏禹三代之貝瑞霊奇之秘寶其有次此者貝盈尺狀如赤電黑雲謂之紫貝素質紅黑謂之朱貝青地緑文謂之綬貝黑文黄蓋謂之霞貝紫愈疾朱明目綬清氣障霞伏蛆蟲雖不能延齡增壽其禦害一也復又下此者鷹喙蟬背以逐温去水無奇功貝大者如輪文王得大秦貝徑半尋穆王得貝殼懸於觀秦穆公以遺燕鼂可以明目遠察宣王宣金南海貝如珠礫或白駁其性寒其味甘二水毒浮貝使人寡無以近婦人黑白各半是也濯貝使人善驚無以親童子黄脣點蚩有赤駁是也雖貝使病瘧黑皋無皮是也瞬貝使胎消勿以示孕婦赤帶通背是也慧貝使人善忘勿以近人赤熾內殼赤絡是也醬貝使童子愚女人淫有青脣赤皋是也碧貝使童子盜背上有縷句脣是也雨則童霽則輕委貝使人志強夜行伏迷鬼狼豹百獸赤中圓是也雨則輕霽則重

緯畧云師曠有禽經浮丘公有鶴經雖相畜亦有牛經馬經狗經下至蟲魚有龜經鼠經唯朱仲所傳貝經惟奇甚朱仲受經於琴高



国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

右朱仲相貝経五朝小説魏晉藝術家中有之享保乙巳歳八月下浣於泉谷山中寫之

按本草綱目曰朱仲受之於琴高以遺會稽太守嚴助云云

右著作所乃今諸二巻也竹窟を考るの影る

あらぎ只弄玩の巻ふるよ余が毋紀南和京山の產形くこを國好今をこ生ひあるる紛て幼者ち

時より此好玩なるまゝ今うる接ぎ三條の眼以今譜

をこ沿を幸竹綱目及び大和本草等を外こをつこの

佞書今若多しといへど毎是食用物產乃為小記を

以著ハ書ぐ戯弄れ有るまゝ

玩となるざふ類ハ是を載ぐ後覧の人遺漏を罪

ちるまゝ形の物玩好の今小於くハ及ざれ書形を

增益せん事を希ぐ

寛延二歳三月上澣

大枝流芳記

7
2
73

明治二乙巳年五月書写了

男爵伊藤圭介先生自筆
AUTOGRAPH OF
BARON KEISUKE ITO.



大枝流芳先生著

# 雅遊漫録 全十冊 追付出来

寛延四年 辛未正月本出

江戸通本町三丁目 西村源六

大坂心斎橋順慶町 渋川清右衛門

同 南新町壱丁目 伊和惣兵衛

書林

国立国会図書館 タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-73

ガラス使用